

プロ野球界での超有名人であり、ミスタージャイアンツと言われた元巨人軍選手の長嶋茂雄さんが、日本経済新聞社の私の履歴書の中で、自らの野球に対する真髓を語っています(野球と成果は、視点の546の野村さんに続いて2人目です)。

一流の成果を出した人物は必ず独自の成果のメカニズムを持っています。私は一般に言われているように「長嶋さんは野球の天才であり、動物的勘を有する男で、生まれながらに野球の才能を持っていた」と思っていました。しかし、私の履歴書を読んで、決して長嶋さんは野球の天才ではなく、やはり、独自の野球ノウハウを創出した努力の人であったことを知りました。

長嶋さんのプロ野球の実績は、安打総数2,471本、本塁打444本、通算打率3割5厘、首位打者6回、打点王5回、本塁打王2回、最優秀選手5回(日本シリーズ4回)でした。すばらしい記録を残した選手ですが、王さん、金田さん、張本さん、野村さん、イチロー選手と比較すると、記録的(数値的)には、一流ではあるけれど、超一流ではありません。しかし、長嶋さんの人気度、有名度、好感度、威厳度...等は最高であり、失礼ながら実績をはるかに上回る評価を得ています。この数値的には一流であるが評価は超一流の格差こそが、実は「長嶋さんの成果のメカニズム」なのです。

長嶋さんの超一流選手である成果を創出するメカニズムは、次の2つです。

ここ一発の場で、ファンの期待に応える一打があり、1安打の価値が大きいことです。長嶋選手は一たん精神をその一点に集中させることにより、成果の高い安打を打っています。ファンの記憶に残る感動のシーンでの一発は通常の安打とは価値が2~3倍、場合によっては10倍異なります。

もう1つは華麗な守備(オーバーな守備?)です。長嶋さんは三塁手であり一番ファンの近くの位置にいるため、守備とはエレガンスにかつダイナミックに見せる手法が必要と考え、もう一步踏み込んでからファーストと投げたらダイナミックになるとか、歌舞伎の弁慶の六方ではないが、どう動けば喜ばれるとかを研究したそうです。エラーも多かったが、守備のエレガンス及びダイナミックさで野球ファンを魅了させました。

この2つの長嶋さん独自の手法により、野球ファンに感動を与え、数値的記録を上回る評価を得ることに成功しました。

長嶋さんが、このような考え方を持ったのは、立教大学時代の野球部の砂押監督から「これからの若い世代は、メジャーを見習わなければいけない。それは個性の重視だ。あのディマジオさえ、全力疾走して決してあきらめないだろう。お客様に評価される自分のスタイルを自分でつくることだ」と言われたことに起因しています。

一般に、野球選手は野球に勝ち、いい成績を出すのが成果ですが、長嶋さんは、野球をもう一步進めて、観客にとって野球はエンターテインメントとして見てもらう場をつくる必要があると考えました。エンターテインメントとは楽しい、うれしい、おいしい、気持ちいい、驚き・異次元を総称する言葉ですが、このエンターテインメントにより客の満足度の高い野球を心掛けています。正に、野球に対する「志の高さ」です。志とは、単に野球の勝ち負けや数値的記録の良し悪しとは別に、せっかく野球を見に来てくれた人々の期待に応え、感動を与えるというよりマクロな成果を創出する行動です。

成果の理論の中に、「戦略と戦術の手法の差は成果が5倍異なる」があります(六車流：流通理論)。

2割5分の野球選手は125本のヒット数、年報2,000万円、3割の野球選手は150本のヒット数、年報1億円、3割5分の野球選手は175本のヒット数、年報5億円と、わずかヒット数を25本余分に打つだけで、年報は2,000万円 1億円 5億円と増加します。これを紙一重の実績による成果5倍の法則と言います。長嶋選手は、ファンを満足させるとの“志”を他の選手より真剣に考え、実行し、超一流の選手との評価を得ることに成功しました。

ちょうど、ワンガリーマータイさんが植林という実績を基に、平和の尊さを訴え戦争を終わらせた成果(ノーベル平和賞を授賞)や、ムハマト・ユヌスさんが、貧乏人に金を貸すという実績を基に、貧乏から脱出する手法を提供した成果(ノーベル平和賞を授賞)と同じです。成果は記録や実績を超える「何か」があって、飛躍的な成果を生みます。きめ細かい野球技術も大切ですが、ファンを注目させる野球手法も大切です。その意味において、長嶋さんは日本一また世界一級の評価の高い野球選手でした。

(参考までに、安打数1位は張本勲さんの3,085本、2位が野村克也さんの2,901本、3位は王貞治さんの2,786本で、長嶋さんは2,471本で7位です)